現代北欧文学18人集

谷口幸男 編

DENMARK

NORWAY

SWEDEN

ICELAND

FINLAND

新潮社

現代北欧文学18人集

谷口幸男編

新潮社

苏工业学院图书馆
藏书章

現代北欧文学18人集

一九八七年九月一五日印刷
一九八七年九月二〇日発行

編　者　谷口幸男
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京四―八〇八
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一

印刷　東洋印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
定価　二四〇〇円

© 1987 Yukio Taniguchi
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-313703-7　C0098

現代北欧文学18人集　目次

▽デンマーク
日曜日の庭での昼食　クラウス・リフビヤ　7
あらしの夜　ヴィリアム・ハイネセン　21
夫婦　ドリト・ヴィルムセン　37
里子　ヴィリィ・セーアンセン　55
▽ノルウェー
漁師たち　ヨーハン・ボイエル　77
屈辱の干ぶどう　アグナール・ミュクレ　95
草の中　アグナール・ミュクレ　113
赤い反射　トルボルグ・ネドレオース　125
▽スウェーデン
子供を死なせる　スティーグ・ダーゲルマン　143
ほら、例のあの奴さん　スティーグ・クラーソン　151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地獄へ下るエレベーター　ペール・ラーゲルクヴィスト　159
みことば　トルニィ・リンドグレン　171
▽**アイスランド**
選ばれた女　グウズベルグル・ベルグスソン　181
子供のための話　スヴァヴァ・ヤコブスドッティル　197
魚釣り行　ハルドゥル・ラクスネス　209
▽**フィンランド**
あらし　ボ・カルペラン　239
櫛　ヴェイヨ・メリ　247
爺さんと少年　ハンヌ・サラマ　255
レポート　エーワ・キルピ　265
*
現代北欧文学について　谷口幸男・坂井玲子　289

カバー　Steinunn Thórarinsdóttir／*Iceland*

表　紙　Kain Tapper／*Finland*

本　扉　Bård Breivik／*Norway*

現代北欧文学18人集

© 1987, Nordic Council of Ministers.
This book is published in Japan by arrangement
with Nordic Council of Ministers.

クラウス・リフビヤ／早野勝巳訳

日曜日の庭での昼食

Søndagsfrokost i haven

クラウス・リフビヤ　Klaus Rifbjerg

デンマークの作家。一九三一年生まれ。詩人として出発したが、その後小説、批評、紀行、映画・演劇の脚本など幅広い活動をしている。「人間の奥底には絶望がひそんでいるが、それとともに生きて行くためには、問題に立ち向かわなければならない」と自ら述べているように、人間性を鋭く追求し、絶えず問題作を発表している。現代デンマークの代表的な作家の一人であり、芸術院（アカデミー）会員でもある。

デビュー作『みずからを監視して』（一九五六）と、それに続く『戦後』（五七）は、自伝的要素の濃い詩集で、「私」が環境に直面して行く様子をアイロニーを込めて描いている。代表的な小説『慢性的な純潔』（五八）は、二人の若者と一人の女の子をめぐる思春期の性を大胆に取り扱い、話題になった。『アンナ（私は）アンナ』（六九）は、三十五歳の大使夫人が故国のデンマークへ送り返される旅で、自己のアイデンティティーを求める小説である。何一つ不自由なく過ごしていた彼女は、夫の赴任地のパキスタンで現在の特権的な身分は、他人の犠牲の上に成り立っていることに突然気づいたことから、錯乱状態になり、過去の自分を消して新たな自分を求めたいとの衝動に駆られる。『日曜日の庭での昼食』は、『夏』（七四）に収められている。リフビヤは、この短編集で若者の恋愛と結婚の問題を、心理分析を通じて描き出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼は自分が馬であると想像しようと試みた。もしも本当に馬で、片方の前脚を曲げて、蹄を頬にあてがった格好で座っているとすれば、たぶん今彼が義父に起こしている反応とは違ったものを起こしているだろう。そうなればたぶん、しばらく口を閉ざしているだろう。あるいは他の話題を選んでいるかもしれない。だが、目下は反応なんて問題にもならないのだ。そう、これは砲撃なのだ。そして自分は馬ではなく、若者にすぎないのだ。

にもかかわらず、彼は状況を思い浮かべようと試みた。アメリカヅタにおおわれ、クレマティスが壁に這い上がった別荘での日曜日の昼食。突然彼はつやのある大きな馬に変身した。ガーデン・スツールを危うく尻で押し潰しそうになったが、それでもおとなしく座って、株式に比べ債券の有利な点についての長い講義に耳を傾けている。いや債券に比べて株式の有利な点だったかもしれない。いずれにせよ、これほど馬の関心を引かないものもない。馬には株式とか債券を考えることができないのだ。いや、もっと始末の悪いことに、馬はそのどちらも所有していないし、今後も所有することはないだろう。彼にしても同じことだ。突然、彼はいなないた。長いいなないき方ではなかったが、いつもに似合わない音だったので、向かい側に座ったワイシャツ姿の白髪の紳士が、降らせ続けた言葉の雨をちょっとの間中断し、彼を凝視した。ほんの一瞬であったが、

それでも彼は反応を起こしたのだ。若者はにこやかに笑って、首を傾けた。彼は馬ではなかった。今は決して馬ではなかったが、それでもいなないたのであり、それがもっともらしく響いたのだった。

彼には馬が気に入ったが、豚でもよかったし、牛でもよかった。ヘラジカでもいいだろう。そう、ヘラジカにはどこか素晴らしいところがある。大きく、巨大だ。角張っているが、それでいて、しなやかで、優美だ。頭はまるでスーツケースのようで、苔むした古木のような角を生やしている。鼻づらも巨大で、湿って温かい。フレデリクスベアの古い庭園にヘラジカが出現すれば、センセーションを起こすだろう。それが彼と同じカールという名で、蹄を頬にあてがい、白塗りのガーデン・スツールに腰をかけ、義妹が作ったニシン・サラダを食べ、金融市場の動向についての十五分間の講義に耳を傾けているとすれば、センセーションは一層大きくなるだろう。

のちほど葉巻がコーヒーとともに差し出されると、ヘラジカはノルランド特有の注意深さで火をつけ、とてつもなく大きな鼻孔から煙を吹き出す。加圧されたボイラーから吹き出る二筋の旗。ヘラジカになることは、実に素晴らしいことだ。ヘラジカは心の落ち着きを持っている。沼沢地、藪、森の中で威厳を示す。スタイルというものを身につけていて、きわめて平然と葉巻を吸う。必要とあれば、いや、その気になりさえすれば、オーレスン海峡を泳ぎ渡ることだってできる。ヘラジカが心に浮かぶことを何でもする、それも思い通りにする、ということは信じ難いことだ。ヘラジカの愛も印象的だ。この点に至っては、スーツケースの規模ではなく、貨車の規模になる。同じ軌道を走る二台の貨車が、柔らかくぶつかり、互いに乗り合う。その間も葉巻の煙が、鼻孔からのぼり続けるのだ。

座ることは、ヘラジカにとって自然な姿勢でない。逆にこの動物はまったく自由で、型にとら

われないのだ。百獣の王ライオンはいろいろな姿勢で座るのが見られる。あるローマ的状況では、ライオンがテーブルについているのも考えられないことではない。それに、ヘラジカは北欧の森の王であったし、今後もそうであろう。さらに考えてみると、古いスウェーデン王朝（これがヘラジカと関係していたのは明白だが）には、どこかヘラジカめいたところがあった。つまり、人間――ヘラジカ――王だ。ヘラジカは、玉座につくがごとく座った。ヘラジカは無窮の歳月スウェーデンを統治し、同時にテニスをしてきたのだ。もちろんヘラジカは、テーブルにつくことができる。実際ホモセクシュアルなヘラジカを、考えることだってできる。ホモのヘラジカ！　スウェーデンの王朝には、それはなかったのだろうか……。ニシン・サラダと沼沢地からの動物についての考えは、必ずしも現実と合致しないというだけなのだ。ついでながら、素晴らしいニシン・サラダだ。ついでながら、素晴らしい日曜日だ。ついでながら、夏だ。ついでながら、素晴らしいことだ。彼はヘラジカがどのようなしゃべり方をするのか知らなかった。だが、彼がヘラジカのように声をあげようとすると、大変もっともらしく響いた。まるでうなり声のようだった。もちろんヘラジカは、うなり声を上げるのだ。

しばらくのあいだテーブルの周辺は静かだった。太陽が蔓の間から輝いた。ムクドリがはじかれたかのように、芝生の上を跳んだ。たぶん輸入急増の講義は、終了したのだろう。おそらく講義は、おもに国内に流入する輸入品の急増についてだったのだろう。あるいは、カールがヘラジカのようなうなり声を上げたので、この日曜日の出席者は、ろくろく食事が喉を通らなかったかもしれない。いや、彼はうなり声を上げなかったかもしれないのだ。たしかに咳払いはしたが、それが沼沢地のヘラジカそっくりだと想像するには、かなりの想像力が必要だろう。軽く喉を切る音だったから、きわめて小さな馬、いや山羊、子山羊がたてることができる程度のものだった

ろう。とくに話題にするようなことではない。彼は食卓についている他の四人を眺めた。ちょうど食事中で、みんな眼をそらしていた。彼が本当に動物に変身したので、みんなは見る勇気を持っていないのかもしれない。座ったままで、こう考えていたのだろう。ヘラジカが座っている。いや、ヌーかもしれないし、野獣かもしれない。ともかくも白塗りのガーデン・スツールに腰をかけて、テーブルの向かい側についている。いや、これは正しくないのかもしれない。火酒（スナップス）か天候に違いない。だが、他の者がそれに気づいたかどうかは、まったく分からない。もしそれが本当だとすれば、大声を上げ、逃げまどい、動物園か消防署に電話をかけるだろう。

金融状勢、いや、一般に「状勢」といわれるものの奇妙な点は、それが遠く感じられることだ。人は常にその中で生きているのだから、歴史は「状勢」に満ちていると考えることができる。状勢は人間の関心をおおいに引くものである。ことに彼の義父のようなタイプの人間の関心を引くのだ。こうした人々は「状勢」を議論して、何時間でも費やすことができる。彼らにとっては、これは抽象的なことではなく、きわめて具体的で、身近なことなのだ。きっと彼ら自身が「状勢」を作り出すことに関与しているのだろう。あるいは関与していると信じているのだろう。カールは顔を傾けて、知的に見えるように努めた。明敏性はヘラジカのきわだった特徴ではあるまい。動物には威嚇したり、装ったりする能力はある（これは生存競争と関係がある）。そして驚くべきことは、挑戦者がなんとたやすくその身振りに愚弄されたり、それによって勧誘を受けたりするかである。会話の中断が長引いた。ふたたび貯蓄銀行頭取が講義を続けたが、それが否定的なのか、それとも肯定的なのかを明白にすることは難しかった。ずっと不安について論じていたことは確かである（これが基本なのである）。しかし、誰が貯蓄し、誰が与え、いつ行動すべきなのか、また購入すべきなのか、それとも売却すべきなのかは決定し難かった。講義がこうし

たことがらを扱ったことは確かである。また、この講義が情熱的に、またきわめて客観的に、そして（頭取と意見を異にするものに対して）痛烈な皮肉を込めて、なされたことも確かであるが、それにもかかわらずヘラジカとしては、これが胃、頭、手、足、そして性との関係を超えたものであることを認めないわけにはいかない。これは必ずしもヘラジカが怠惰な動物であるという理由からではない。時とするとヘラジカは、驚くほど明敏なように思えることもある。しかしそれはおそらく草、枝、沼沢地を通る小道、早朝の霧、樺林上の日没、スウェーデンの王室とその高度に訓練を受けた射手、メスヘラジカとか、オスヘラジカがたわむれる相手に関してであって、国家経済とか債券市場に関してではなかろう。

カールは、義妹の隣に座って、まだチーズを食べ終わっていないのに煙草を吸い始めたリセンを見つめた。彼女にはアメリカヅタとクレマティスの世界から去って、動物界へ逃げる必要がないのだ。彼女は世界の政治・経済状勢に関した議論（あるいは講義）を、始まってもすぐに終わるものとみなすのである。それはそれで終了したこととして、他の話題に移ることができるのである。たとえてみれば、こうである。リセンはある家を訪れ、呼び鈴を押し、ドアが開くと、にこやかに笑いかける。足の半ばまで達するスカートをはいて立ったまま、「今日は」とか、「ご機嫌いかがですか」と挨拶して、中へ入る。レインコートを掛けると、居間まで付いて行く。そこにホームメイドのパン、クロスステッチ刺繍のことを話したがっている人がいれば、彼女はそうしたことを話すだろうし、ラシーヌや「リヴィエラにて」のダニー・ケイについて話したがっている人がいれば、そうしたことを話すだろう。貯蓄銀行の頭取が経済状勢について話したがっていれば、彼女はただ黙って眼をそらしているか、煙草を手にし、顔を横へ向けて、大きな青い瞳で芝生やツグミを眺めるのだ。そして頭取の講義が終わると、リセンも我に返り、煙草を消すと、

バラの中へ投げ込む。頭取は嫌な顔つきでみるが、（なにも言わない。というのは、娘が日曜日に戻って、昼食を取るのを喜んでいるからだ）彼女はおそらく床に入ってからも、これと殆ど変らないのだろう。文字通り頭を後へやって、あらぬ方を見てから、突然我に返り、クロスステッチ刺繍、コルネーユ、「シエラ・マドレの宝」のボガートについて話そうとするのだろう。リセンは大変美しかったが、彼女の注意散漫ときたらおそろしいほど効果的で、強力であった。（気立ては良いのだが）これは、ヘラジカの世界からかけ離れたものである。ヘラジカの世界は、はるかに複雑で危険なのだ。突然吠えられたり、蹄の音で脅されるおそれがある。バターの中に蹄を立てられたり、二つの鼻孔から義母と義妹がともに火酒を吹きかけられる危険がある。リセンは犠牲者でもなければ、その支配者でもなかった。だが、父親とは同じでないにせよ、自分を状勢の支配者、創造主とみなす者の一人だったのである。

彼らにはヘラジカと共通する性格が一つだけあった。ヘラジカが住居を定め、結婚し、子を産むのは自然なことである。これは自然の法と呼ばれるものである。心の中ではあったが、カールは「義父」、「義母」、「義妹」の表現を受け入れていた。誰が誰であるかを理解し、分類し、そこへ封じ込めることは実用にかなっている。しかし彼は、リセンを「フィアンセ」とみなすことを拒否したのだった。そしてカッコをつけなければ、彼はほかの三人の分類ともなんら関係がなかっただろう。彼らは「若いカップル」にとって相応しいこと、相応しくないことについて争ってきた。それは言葉を交えなかったこともあったし、大いに交えたこともあったが、その結果は、「義母」の赤い眼にもかかわらず、リセンは週末にはカールのところで過ごすことになったのである。二人が日曜日に昼食のために訪れるのは、「罪深い生活」の弁明であり、また若いものが常に年上の者に負う借金の返済の試みでもあった。だからこそ、頭取がこれほど長々と、しかも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com